

日韓男女の発話の重なるの対照研究

姜 昌妊

1. はじめに

日常的な会話においては、話し手の発話が未だ終わっていないのに次の発話が始まったり、発話の途中に割りこんだりして、会話が重なることがよく見られる。Sacks 等(1974)は会話の「話者交替」モデルの中で、「一度に話すのは一人であり」、また「同時に二人以上が話すこともありうるがごく短い時間である」とした。しかしこのような Sacks 等の主張は一人が話をし、もう一人は話し手の話が終わるまで相手の話を妨害しないで最後まで聞くべきだというアメリカ人の会話習慣に基づいたものであり、全ての言語と文化において当てはまるとは限らない。水谷(1984)は日本語話者の話し方を共話とした。共話とは話し手と聞き手が協力しあって共同で発話を作り上げることである。従って日本語話者の会話においては話し手が話している時、もう一人も会話に積極的に参加し、会話の重なりが頻繁に起こりうる。ところが、Sacks 等(1974)の「一度に話すのは一人」という原則に基づいて、これまでの発話の重なるの研究は「話者の権利への侵害」、「妨害」という面を積極的に取り上げ、研究がなされてきた(Zimmerman & West 1975, 山崎1984)。その一方で最近、発話の重なりを「発話への積極的な関与」、「発話への支援・促進」と肯定的に見なす研究も行われるようになった(Tannen1992, 深澤1997)。

Hayashi(1988)は日本人とアメリカ人の同時発話を調査し、日本人はアメリカ人に比べ同時発話の頻度が高く、またその多くは相手の「ターン」^(註1)を支持し、継続させるためのものであるとした。それに対し、アメリカ人は「一度に話すのは一人」という原則を強く意識し、同時発話が少なく、また同時発話はターンを取るために競争する場面で起こるとした。Hayashi(1988)の研究結果は、発話の重なるの使用とそれに対する評価が文化や会話スタイルによって異なることを示唆している。

本稿では、文化背景を異にしている韓国語話者と日本語話者の発話の重なりの実態を調査し、その違いを明らかにし、韓国語話者と日本語話者との円滑なコミュニケーションに役立てようとする。その際発話の重なりを「妨害」、「支持」の両方の観点からとらえ、その内容によって4種類に分類し、重なりの使用を韓国語と日本語の差及び男女の違いの視点からを明らかにしようとする。

2. 会話の参加者とデータの収集

大学の講義室を録画室として使用し、韓国と日本の母語話者同士の日常的な会話を録音・録画し、それを資料として用いた。韓国と日本の大学生、同年代の同性の親しい友人の二人が1組になって会話に参加した。参加者は韓国、日本それぞれ女性6組(12人)、男性6組(12人)、計12組(24人)ずつである。会話の話題は与えないで、参加者が自由に選んで話すようにした。会話の録音と録画は各組30分ずつ行った。そしてその中で会話開始から10分を除き、それに続く10分間を分析の対象にし、文字化した^(註2)。韓国語話者と日本語話者、それぞれ男性6組、女性6組、計12組の各10分間計120分のデータを資料として用いた。

3. 重なるの定義と研究の範囲

本稿で、「重なり」とは「ある一時点において、二人の話者が同時に話をし、二人の発話が重複したことを指す。本稿での「重なり」は「実質的な発話」の重複を意味し(会話例1)、「あいづち」と「実質的な発話」(会話例2)、あるいはあいづち同士の重なりは含まない^(註3)。

会話例1)

- 1I: 大学入ってから1回も | 受けてない。 |
2J: | あたしも | 受けてない。
3I: うーん。高、高、しかもいつやったかな、高3で受けたんかなー、でも…。

会話例2)

- 71A: でも、なんか知らんけどここまで続いたとってんやんかー。
72B: | へー |
73A: | うーん |。やっぱ、なんか去年にな、後輩がぎょうさん入ってから…。

4. 重なりの種類

重なりは次のように4種類に分類した。

- 1) 「終了勘違い」：話し手の発話が終了したと勘違いしたため、もう一人が発話を開始して、継続する話し手の発話と重なってしまう場合である。現時点の話し手の発話の終末部に、倒置（あるいは付加）部分が現れた場合（会話例3）、現在の話し手のポーズや沈黙のあと、二人が同時に発話を始めるという場合（会話例4）などがある。

会話例3)

16H：ストレスだったら食べ、食べるん？ | やっぱり |

17G： | もう、すごい | 食べる。まー運動するからかなー。

会話例4)

71M：おれらのリーグには全国優勝したチームがおるし。

(笑い) | そんな勝てるわけないやん |

72N：(笑い) | まー上から下まで |

会話例3では話し手Hの質問が終わったと思って、GがHの質問に答えているがHがヤッパリを言い加えることによって、言葉が重なってしまった。会話例4ではMの話聞いて、M・Nが一緒に笑ったあと、二人が同時に話し始めて会話が重なっている。

- 2) 「遅れ」：話し手の質問などの働きかけに対して、相手の反応が遅れたため、話し手がことばを続け、重なってしまう場合である。質問に対して、相手がすぐに答えないと、現在の話し手は自分の発話が相手に伝わっていないと思い、内容を付加したり、問いかけ方を変えて再び質問したりし、相手の少し遅れた応答と重なる場合である。

会話例5)

6L：シューティングやから。

7K：何時まで？

8L：2時半から、あんまー決まってない。

9K：アー、んでな、放課後 | うちも多分 |

10L： | うん、でも | 4時半か、5時ぐらい。

11K： うんうんうん。

会話例5はクラブのバスケットのシューティングが何時までかと聞いたKの質問に対してLの答えが遅れ、9と10番の発話が重なっている。

3) 「協力的な重なり」: 話し手の発話に支持、賛成、理解などを示したり、関わりのある情報を提供したりすることによって、話し手の発話が円滑に進むように促し、話し手のターンの保持を助けるものである。また「協力的な重なり」は話し手の発話を会話の相手が代わりに完結したり、参加者同士が共同で発話を作り上げたりする場合も起こりうる。①先取り、②質問・確認、③補足、④言い換え、⑤コメントなどが含まれる。

①「先取り」は話し手の発話が終わっていないのに、続きの発話の内容を予測し、関連のある発話を言うてしまうことである。つまり先取りは話し手の発話を予測し一緒に完成したり、話し手が探していることばを提供したり、話し手の質問を予想して先に答えたりする際に起こるものである(例6、例7)。発話の先取りは話し手と聞き手が協力しあって一つの発話を作り上げるので、参加者間の仲間意識や話題についての共通の知識や理解が前提となる。また話し手の話が終わらないうちに発話を予想して言うてしまうので、予想が一致する場合とそうでない場合がありうる。

会話例6は、Dがビデオの発売日を知っており、その予想が一致した場合であり、会話例7は、話し手Oがザードのベストアルバムを誰が持っているか聞こうとしたが、Pがその質問を予想して先に反応してしまった例である。

会話例6)

63E: ... あわし、そこまでチェックしなかってさー。あれ、あの日に | 発売 | ってるやんか?

64F: | 発売 | うん。

会話例7)

104O: だれが、ザード | ベスト | 持ってる? |

105P: | XXX先輩 | 持ってると思う。

②「質問・確認」は先行発話の内容を確かめたり、発話の中で不明な内容または先行発話と関わりのある内容を質問したりすることによって、話し手と聞き手の情報のギャップを埋めようとするものである(会話例8)。「質問・確認」は話し手の即座の反応を要求するので、話し手は聞き手の

働きかけについて、何らかの反応を見せたり、あるいは無視したりしながら自分の発話を続ける。また時として、話し手は話をしながら、同時に聞き手の話を聞き、それについて答える場合があるが、その際話し手は話し手と聞き手の役割を同時に遂行することになる。会話例8は韓国人女性の会話として新車について話しているが、話し手eは家の近くの商店街で新車を見たと話すと、fがその車の形について質問をし、話し手eはfの質問に反応を見せた後自分の発話を続けている(13e, 14f)。会話例9は話し手Uがアルバイトの話をしながら、徹夜勤務だったら、多くのお金をもらえると言っているが、Vはそれが無理ではないかと聞いており、Uはそれに答えた後、自らの発話を続けている。

会話例8)

13e: 흰색이 또 상가 앞에 임시번호판이 한개 있더라. | 근데 이쁘 | 더라. 응.

14f: | 이빠?이빠? |

15e: 베르나가 선생님말이 그 뒤가 루비나투랑 똑 같다구 우리가 | 막그렸잖아? |

16f: | 비숫해. 응. |

13e: 白い車で臨時ナンバーのものが商店街の前に一台あったよ。| それできれい | だったよ。

14f: | きれい?きれい? |

15e: ウン。その後 (の部分)がルビナⅡと全く同じだと私達が | 言ってたじゃない? |

16f: | 似ている。うん。 |

会話例9)

76U: 週4で、オールナイト全部やれば一、16万、| 17万行けどー | それは

77V: (笑い) | 全部オールナイト無理やろう? |

78U: 無理やから…。

③「補足」は話し手の発話と関わりのある情報を追加的に提供し、④「言い換え」は先行話者の発話と同じ内容を別の言葉で切り替えるもの(会話例8, 16f)である。また⑤「コメント」は先行発話に関する聞き手の肯定的な意見、感想、評価などを述べることである(会話例10)。会話例10は英語検定試験の話をしながら、話し手Iが大学に入ってから試験を受けたことがないと言ったら、Jが自分も同じ体験を持っていると話し、話し手との類似性を強調している。

会話例10)

1I: 大学入ってから1回も | 受けてない。 |

2J: | あたしも | 受けてない。

3I: うーん。高、高、しかもいつやったかな、高3で受けたんかなー、でも…。

以上のように「協力的な重なり」は、先行話者の発話について支持を示したり、意見の一致や情報の共有を表したりすることによって、相手との一体感を高め、話し手の発話が円滑に進行するように促すものである。話し手は自分の発話が聞き手に受け入れられ、同意されたと思い、リラックスした雰囲気の中で自分の意図する方向へ会話を展開することができる。また「協力的な重なり」は話者交替が起こらない場合が多く、たとえば話者交替が起こって、聞き手が一時的にターンを取るとしても、ターンはすぐに先行話者に戻るようになる。つまり、発話の主導権は話し手が握っていることになる。また話の基本的な流れを変えることなく、話し手の発話内容を更に発展させることになる。時々、聞き手の積極的な働きかけによって発話の内容がかすかに変わることもありうる。しかしそれは聞き手の関心内容に話し手の注意を向けさせ、話し手の発話の中に聞き手の話題が反映されるように働きかけ、話し手と聞き手の間の情報や関心のギャップを埋めるようなものである。それによって話し手と聞き手の両方の関心が発話に取り入れられ、相互のコミュニケーションが深まることになる。

- 4) 非協力的な重なり: ターンを取ろうという明確な意図をもって、話し手の発話の途中で割りこんで、重ねた発話を優先させようとするものである。話題転換、不同意、自己発話優先などがある。話題転換は話し手の発話と関わりのない新しい話題を導入することによって話題を変えることである(会話例11)。また不同意は現在の話し手の発話について賛成していないことを明示的に示すものであり(会話例12)、自己発話優先は一時的に中断された話題を再導入し、現在の話し手の発話を遮ったり、または相手の発話途中で割り込んだりして自らの話を優先させようとするものである(会話例13)。

させることによって、円滑な会話の進行を妨げるものである。

発話の重なりは、重ねた側が何をしようとしたのか、また重ねられた側がそれをどのように受け入れるかが重要である。本田(1997)は談話進行における重なりを大きく「話者交替の重なり」と「共話の重なり」と分類にしたが、本稿では、4種類の重なりを共話の観点から関連づけて見る。まず「終了勘違い」と「遅れ」は発話の終了時点や、話者交替のタイミングの予測が間違っただけに起こる重なりであるので、共話の成立に中立的なものである。「協力的な重なり」は参加者同士が協力しあって、互いの発話を支援したり、共同で発話を作り上げたりするので、「共話の重なり」と言えるだろう。それに対し非協力的な重なりは進行中の相手の発話を中断させ、割り込んだ人の発話を成立させようとするので、「共話」の成立を妨害するものである。これを簡単にまとめると下記の通りである。

終了勘違い、遅れ…話者交替の予測の間違い（中立的）

協力的重なり…共話の重なり

非協力的重なり…共話の成立に否定的

5. 調査の結果および考察

5.1 韓国語と日本語の会話における重なりとその特徴

第一に、両国ともに12組の計120分間ずつの会話の中で、発生した重なりの回数を見ると、日本語話者751回に対し韓国語話者459回で、日本語話者の方が約1.6倍多い。また二人10分間の会話、つまり一人五分間の会話の中で起こった重なりの平均は日本語話者31回に対し韓国語話者は19回である。日本語話者は重なりの頻度が非常に高い。つまり日本語話者は韓国語話者より重なりを積極的に用いて、お互いの発話に参加し、会話を進めていることがわかる。米語に比べて日本語は重なりの発話が多い(Hayashi1988)という研究結果もあったが、本稿でも韓国語話者に比べ日本語話者が多い。

日本語と韓国語の発話における重なりの回数及びその種類は表1の通りである。

表 1) 日本語と韓国語の発話における重なるの種類と回数

(男6組、女6組、計12組120分)

	協力的な 重なり	非協力的 な重なり	終了勘違い	遅れ	合計
日本人合計	561 (74.7%)	73 (9.7%)	108 (14.4%)	9 (1.2%)	751
韓国人合計	312 (68%)	82 (17.9%)	60 (13.1%)	5 (1.1%)	459

第二に、重なるの種類を見ると、日本語話者と韓国語話者ともに「協力的な重なり」が「非協力的な重なり」を上回っており、親しい友人同士の会話において発生する重なりは協力的な重なりが多いと言えよう。まず協力的な重なりをみると、その回数は日本語話者が韓国語話者より1.8倍ほど多く、比率も日本語話者の方が高い。一方非協力的な重なりは回数、比率ともに韓国語話者の方が高い。

日本語話者にとって協力的な重なりは友好的に会話を交わし、会話を円滑に進める上で重要なストラテジーのようである。日本語話者は「協力的な重なり」を頻繁に使い、相手の発話に支持や強い関心を示し、相手の発話が継続して維持するように支援している。さらに、このような日本語話者の発話途中での支持や同意の表明は円滑な人間関係を築くのに寄与すると共に、会話参加者の相互作用を活性化させ、会話の展開を早めることになる。そのため日本語話者の会話はテンポが早く、話し手と聞き手が頻繁に入れ替わる。しかし時として、重なりが多いため、会話が頻繁に入り混じっており、一人の発話がどこまでであるか判断しにくく、話し手と聞き手の見分けが付かないケースが目立っていた。

それに対し韓国語話者は日本語話者ほど、発話の重なりを賛成、同意、承認の手段として用いていなかった。つまり相手と発話を共同で作り上げるより、自らの発話を成立させようとする傾向が強かった。非協力的な重なりの中でも、韓国語話者の会話では、現在の発話に同意しない反対の意見を述べるものが数多く見られた。相手の意見に賛成しない場合には、発話の途中でも、割りこんで自分の意見をはっきり示す韓国語話者の会話の特徴が見られ

る。そしてこれは日本語話者が相手との意見の対立や衝突をできるだけ避け、話し手の発話に協力し、一体感や共感を高めようとする会話スタイルをもっていることとは対照的である。

以上をまとめると、以下ようになる。日本語話者は話し手の発話に積極的に参加し、発話が重なることが多い。その重なるの多くは協力的な重なりとして、話し手の発話を支援したり、有益な情報を提供したりすることによって、話し手の発話の進行を促し、その発展に寄与するものである。つまり日本語話者は会話参加者が協力しあって、共同で発話を完成しようとする共話的な傾向が強かった。それに対し、韓国語話者は日本語話者に比べ、現在の発話が終わったあと、次の発話が始まるように、話し手の発話途中に言葉が重なることを避ける傾向があった。また重なるの総数に対する協力的な重なるの比率は高かったが、その反対に自分の意見をはっきり主張する「非協力的な重なり」が相対的に多かった。つまり韓国語話者は、発話は話し手一人で完成すべきだという意識が強く、話し手と聞き手の役割の違いを明確にする対話的な姿勢を見せた。

5.2 男性と女性の会話における重なるの種類とその特徴

次に両国語の会話において発生した重なるの男女の差について述べる。表2は表1を韓国と日本それぞれ男性と女性の性別に分けて示したものである。

表2. 日韓男女の会話における重なるの種類と回数
(男女、各6組計60分)

	協力的な重なり	非協力的な重なり	終了勘違い	遅れ	合計
日本人女性	321 (77.3%)	33 (8%)	55 (13.3%)	6 (1.4%)	415
日本人男性	240 (71.4%)	40 (11.9%)	53 (15.8%)	3(0.9%)	336
韓国人女性	199 (74.8%)	40 (15%)	26 (9.8%)	1(0.4%)	266
韓国人男性	113 (58.5%)	42 (21.8%)	34 (17.6%)	4(2.1%)	193

第一に、60分間の発話中、発話の重なる回数を見ると、日本、韓国ともに男性より女性のほうが多い。日本の男性は女性の81%に対し、韓国の男性は女性の72.5%で、日本語話者より韓国語話者の男女の差が大きいと言えよう。タネン(1992)は男性より女性の方が会話で重なりを好んで多用するとした。さらにその重なりは会話に積極的に参加し、相手と深く関わり、〈親和〉を築こうとする建設的な重なりであるとしたが、本稿でも同じことが確認できた。

第二に、重なるの種類ごとに男女差を見てみよう。まず協力的な重なる回数を見ると、両国いずれも男性より女性の方が協力的な重なりが多い。日本人男性は日本人女性の74.8%に対し、韓国人男性は韓国人女性の56.8%で、韓国語話者の男女差が大きい。また重なり総数に対する協力的な重なるの比率を見ると、日本人女性・男性・韓国人女性は比率が70%を超えているが、韓国人男性は60%を下回っている。日本人女性・男性・韓国人女性は協力的な重なるの回数が多く、比率も高いなど共話的な姿勢が見られた。しかし韓国人男性は協力的な重なるの回数、比率共に低く対照的な面を見せた。

次に非協力的な重なるの割合を見ると、韓国人男性、韓国人女性、日本人男性、日本人女性の順に割合が低くなっている。両国ともに女性より男性の方が自らターンをとって、自分の発話を優先的に成立させようとする傾向が強いが、その傾向は非協力的な重なるの割合が20%を越えている韓国人男性の方が日本人男性より強い。

韓国人男性の場合、一度に話すのは一人であり、発話は話し手一人が完成すべきだという意識が強いようである。また発話の重なりを消極的にとらえ、話し手が話している最中は重なりによって相手の話を遮ってはいけないという意識が、韓国の女性に比べて強く働いているのではないだろうか。そのため発話の重なりが少ないのである。また会話中、発生する重なりの中で、話し手の発話に対し、自分の意見を明確に示すときに発生する重なりは多い。特に注目すべき点は、韓国人男性は協力的な重なるの回数は一番少ないけれども、共話を妨げる「非協力的な重なり」の回数は一番多いことである。それに対し、日本人男性・女性と韓国の女性は話し手の発話に積極的に参加し、話し手と協力しあって、発話を作り上げていく。また発話の重なりを積極的

にとらえ、発話の中に重なりが頻繁に発生する。またその重なりのおよそほとんどは話し手の発話について理解や同感を示し、相手の発話が継続維持するように支援する協力的な重なりである。

6. 重なりの使用と価値観の違い

本稿では実際の会話で使用された発話の重なりを取り上げ、韓国語と日本語の違い、男女の差について考察してきた。その結果日本語話者は韓国語話者に比べ重なりを頻繁に使用し、話し手の発話に積極的に参加していた。またその重なりの多くは話し手の発話を支持したり、関わりのある情報を提供したりすることによって、話し手の発話が円滑に進むように促す協力的な重なりであった。それに対し、話題を変えたり、不賛成を表す非協力的な重なりは極端的に少なかった。一方、韓国語話者は日本語話者に比べ重なりを消極的にとらえ、重なりの使用が少なかった。特に協力的な重なりは日本語話者に比べ圧倒的に少なかったが、非協力的な重なりは日本語話者より相対的に多かった。つまり、日本語話者は参加者同士の協調や人間関係を大切にし、参加者が協力し合って発話を完成しようと共話的な姿勢で会話を進めていた。それに対し、韓国語話者は自分の主張を相手にはっきり示し、一人で発話を成立しようとするなど、話し手と聞き手の違いを明確にする対話的な姿勢で会話を進めていた。また重なりの使用における男女の差を見ると、両国ともに女性は相手との関わり、人間関係を大切にし、話し手の発話に対し支持や理解を示し、その発話が継続維持するように協力していた。それに対し、男性は独立を大切にし、女性ほど相手の発話に支持や賛成を示さず、自らの発話を優先させようとする傾向が強かった。そしてそのような男女の差は韓国語の会話でははっきり表れた。日本語では男女ともに共話的な姿勢で会話をし、男女の違いはあまり見られなかったが、韓国語では女性は共話的、男性は対話的であるという男女の違いが大きかった。

これらの調査結果は二つの文化における価値観の違いを反映していると思われる。即ち、協力的な重なりが多く、発話の重なりを頻繁に使用している社会においては、発話の重なりは現在進行中の会話への積極的な参加として

評価され、歓迎される。それに対し非協力的が多く、発話の重なるの使用が少ない社会において発話の重なりは現在の話し手に対する失礼で無礼な行動と見なされ、否定的に解釈される。前者のタイプの社会においては一人の発話が終わってから、次の発話が始まるとは限らない。参加者同士の協調、人間関係を大切にし、話し手が発話している最中に、聞き手はいづちをうつつだけでなく、発話を重ねて、話し手の発話に積極的に参加している。そのため話し手と聞き手の役割の区別がつかず、時には話し手と聞き手の役割を同時に遂行しながら、会話を進めている場合もある。それに対し、後者のタイプ社会においては参加者同士のそれぞれの役割や立場の違い、独立を大切にし、現在の発話が終わった後、次の発話が始めるように、話し手の発話途中で言葉を重ねないようにしている。その結果、話し手と聞き手の役割がはっきりしており、一人で発話を完成することが多い。同じ重なりであっても、その社会が前者と後者のどちらの価値観を重んじるかによって、発話の重なりに対する評価は正反対になるだろう。

重なるの多い日本語話者—中でも協力的な重なりが多く、非協力的な重なりが少ない—は前者のタイプだと言えよう。しかし、韓国語話者は日本語話者に比べ発話の重なりがかなり少なく、非協力的な重なりが多いので、日本語話者より後者のタイプに近い。特に韓国人男性は韓国人女性よりそのような傾向が強かった。このような日本と韓国の重なるの使用の違いは二つの文化における価値観の違いを反映していると思われる。そして異なる文化背景を持つ日本語話者と韓国語話者とのコミュニケーションが円滑に行われるためには互いの会話スタイルの違いや価値観の違いを認識し、理解しようとする姿勢が重要である。

ここでは詳しく述べるできないが、本稿では調査が終わった後、インフォーマントに会話の進め方及び満足度などについて質問した^(註4)。その質問の中で、「話し手の発話途中で相手が入ったことによって会話が弾んだか」という質問に対し、韓国語話者より日本語話者の方が、また韓国語・日本語話者ともに男性より女性の方がそれぞれ満足度が大きいことがわかった。重なりを頻繁に用いている日本語話者と女性の方が重なりを積極的にとらえ、

それに対する評価が高く、重なりと満足度の相関関係が見られた。

7. おわりに

以上、本稿では重なりをその内容によって「協力的な重なり」、「非協力的な重なり」、「終了勘違い」、「遅れ」、4種類に分類し、重なりの使用における韓国語と日本語の違い及び男女の違いを明らかにした。その結果、日本語話者は共話的、韓国語話者は対話的であり、また両国ともに男性は対話的、女性は共話的な特徴がはっきり表れた。また重なりの使用とそれに関する評価が文化と性別によって異なっていることが示された。

本稿の研究結果は、異なる文化背景を持つ韓国語話者と日本語話者が実際の会話の場面で、互いの会話のスタイルを理解し、コミュニケーションをするのに有用であると思われる。しかし、発話の重なりの使用やそれに対する解釈は文化、価値観、会話のスタイルなど様々な要因によって異なってくる。多くの人数を対象にし、どういうときに重なりを使用し、重ねられた場合どう思い、またそれに対しどのように反応するかを調査分析し、韓国語と日本語との違いを明らかにする必要がある。これは今後の課題にしたい。

註

- (1) 本稿での「ターン」とは話し手が発話権を取って発話を始め、ポーズや他の話者の発話で区切られて話すのをやめるまでの一まとまりの発話を意味する。
- (2) 会話の資料を文字化する際、下記のような表記方法の記号を用いた。
 - 「—」の前の音節が長く伸ばされていることを示す。
 - ? 上昇のイントネーションを示す。
 - 。 下降のイントネーションで文が終了したことを示す。
 - () 非言語行動、笑いなどを示す。
 - | 発話が重なった部分を示す。
- (3) あいづちと実質的な発話の定義は杉戸（1987）によるものである。
- (4) 質問は全部31項目であり、30個の選択式と1個の記述式になっている。

参考文献

- Hayashi Reiko(1988) "Simultaneous Talk-From the Perspective of Floor Management of English and Japanese Speakers", World Englishes 7:3 Pergamon Press.
- Murata, K(1994) "Intrusive or co-operative? A cross-cultural study of interruption" Journal of Pragmatics, 21.
- Sacks, H.Schegloff, E.A.& Jefferson, G.(1974) "A Simplest systematics for the Organization of Turn-taking for Conversation" Language 50 696-735
- Zimmerman D. & West C.(1975) "Sex roles, interruptions and silences in conversation" Barrie Thorne and Nancy Henley(Eds.), Language and Sex: Difference and Dominance Rowley, Massachusetts: Newbury House 105-129
- 江原由紀子・好井裕明・山崎敬一 (1993) 「性差別のエスノメソドロジー」(わいのるず=秋葉かつえ編『おんなと日本語』、有信堂)
- 杉戸清樹 (1987) 「発話のうけつぎ」(『国立国語研究所報告92 談話行動の諸相—座談資料の分析』、三省堂)
- タネン、デボラ (田丸美寿々訳) (1992) 『わかりあえない理由』講談社
- 深沢のぞみ (1997) 「会話の積極関与としての割込み発話—異文化コミュニケーションギャップとの関連—」平成9年度日本語教育学会春季予稿集
- 本田明子 (1997) 「発話の「重なり」と談話進行」(『女性のことば・職場編』現代日本語研究会、ひつじ書房)
- ミンヒョンシク (1997) 「国語男女言語の社会言語学的特性研究」(『社会言語学』第5巻2号、韓国社会言語学会)
- 水谷信子 (1984) 「日本語教育と話しことばの実態—あいづちの分析—」(『金田一春彦博士古希記念論文集 第二巻 言語学編』、三省堂)
- 泉子・K・メイナード (1993) 『会話分析』くろしお出版

(かん ちゃんいむ)